広尾学園中学校高等学校
（前 順心女子学園）

帰国生には最高の環境と条件（10）

校長補佐（国際担当） 小山 和智

2007年4月、新生「広尾学園」がいよいよスタートしました。順心女子学園の帰国生に対する受け入れ体制や個別指導の素晴らしさが男子にも開放されたわけで、特進コースのほぼ半分を男子が占めました。ますます目が離せない学校です。

●広尾学園のスタートダッシュ

広尾学園が「入学時の満足度100%」を公言できる理由との一つは、最初の1～2ヶ月で生徒の一人ひとりが自分の“居場所”を発見できたと実感できることでしょう。それは、共学の学校となった今年も変わりませんでした。入学前の説明会（3月初旬）から始まって、入学式、校内探検やオリエンテーションと続く中で、生徒たちは「学校選択に間違いがなかった」という確信を抱きます。その決定打の一つが、長野県にある学園施設「富士見スコレー」での合宿です。

実に多様な背景や学習暦をもつ生徒たちですから、寝食をともにしながら話し合うことは、とても大切です。もちろん、中には英語のほうが本音が言える生徒もいます。しかし、そうした生徒も自然に受け入れてしまう雰囲気に包まれている（このノウハウが学園の財産）のです。この合宿では、自分の属する学級の「クラス目標」が話し合われ、全体への発表（というよりも“宣言”）がなされます。また、自分自身の「個人目標」を設定し、具体的にどうすればよいのかを考える時間もあります。ペアを作って一方が「どうしたらよいか？」「そのためには何が必要か？」などの質問を徹底的に行い、質問の受け手は忠実に真剣にその質問に答える形で自身の夢の実現方法を探っていきます。教師も“コーチ”として助言や励ましを惜しみません。

広尾学園の生徒は「自尊の心（Self-esteem）」を持っていることが特長ですが、入学時にこうした訓練をしていることで「友達も大事にする」という素地が固められるのかもしれません。その根底に、大橋清貫学園長の口癖が通奏低音のように流れています。

「『思い』という種を蒔けば『行動』という実を刈り取ることができる。『行動』という種を蒔き続ければ『習慣』という実を刈り取ることができる。『習慣』という種をまけば『人格』という実を刈り取ることができる。『人格』こそが人生を成功に導く。」

●“日本人の代表”になる経験

今年の「ジュニア・エイト（J8）サミット」の日本代表チームに広尾学園が選ばれたことは、共学校になったということを鮮明に印象づけました。といいますのも、応募資格が「男女混成チームであること」となっているため、これまで応募したくてもできなかったわけです。今回が初めての応募で、18チームの激戦を勝ち残ってしまったのですから、文字どおりの“快挙”といってよいでしょう。

新入生3名を含む8名のメンバーは、大慌てで“国際会議”の準備に追われることになりました。持ち前の明るさや“度胸のよさ”だけで世界の秀才たちと競い合うことはできませんから、その重圧に耐えながらの周到な準備が必要です。こうした時に支えとなったのが、「学習スキル（Academic Skills）」です。民族や固有の歴史、習慣も価値観・宗教感覚などが全く異なる相手と一緒になって“共同声明”をまとめていく作業で、学園の真価が問われるといっても過言ではありません。

幸いなことに、8名は「母校の期待と栄誉」を見事に担ってくれました。そして何よりも、メンバー自身が“日の丸を背負う”という貴重な経験を宝物として、今後の人生を歩んでいってくれることを期待しています。

http;//www.j8summit.com/japan/pages/5/363

「はい、ポーズ！」でも自由奔放な生徒たち